

<調査研究報告> 英国海岸で確認された鳥類

西土井 誠

1. 英国の鳥類について

英国は欧州の大西洋側に位置し、英国諸島は海に囲まれていることから、他の欧州諸国と比較して海鳥が多い傾向にある。

また、ガルフストリーム湾流の影響で、比較的冬季も温和な気候であり、よって、欧州本土の内陸部と比較すると英国諸島は鳥類の多様性が高いと言われている。

2. 2015 piers 研究会視察中に確認された鳥類一覧

今回は栈橋の視察が主目的であり、積極的に鳥類を観察する機会は少なかった。本稿で挙げる確認種が極めて少ないのはこのためであるが、栈橋の視察時、移動時のバスの車窓等から確認された鳥類を参考に列挙した。今後の英国あるいは欧州視察に参考にされたい。

表 1 鳥類確認種一覧(1)

No	写真(*マークは図鑑より引用)	種名・概要
●見られる場所：街中の公園、芝生など		
1		クロウタドリ (英名 : Black Bird) 日本では <u>迷鳥(※1)</u> として図鑑に記載がある。英国では市街地の路上、公園の芝生などに群れで見ることができた。ちなみにビートルズの曲にある“Black bird”は本種のこと。
2		カササギ (英名 : Black-billed Magpie) 白と(青みがかった)黒の体色が特徴。江戸時代の始めに朝鮮半島から九州に持ち込まれた。今も九州でみられ、佐賀では“県の鳥”になっており特に多く見られる。Southend のホテル前の芝生に群れていた。
3		ニシコクマルガラス (英名 : Eurasian Jackdaw) 日本では <u>迷鳥(※1)</u> として北海道で記録があるが、英国では周年見られる。小型のカラスでくちばしが短い。少し灰色がかかる。白目がちで目つきが悪い。Hawkshead では町中で多数見られた。
4		ハシボソガラス (英名 : Carrion Crow) 日本と同様に英国でも周年見られる。英国ではカラスが居なくなると国が亡びると言い伝えがあり、ロンドン塔では常にカラス(ワタリガラス)が5羽飼育されている。
5		(日本でいう) ハクセキレイ (英名 : Pied Wagtail) 日本では周年みられ、英国でも周年見られる。農耕地、海岸、河川敷、草地などオープンな場所(コンビニ駐車場などにも居る)で見られ、尾を上下に振るのが特徴。Skegness のホテルの池付近で見られた。

表1 鳥類確認種一覧(2)

No	写真(*マークは図鑑より引用)	種名・概要
6		(日本でいう)ホシムクドリ(英名: Starling) 日本では数少ない冬鳥として西日本に渡来し、農耕地、市街地、疎林などに生息する。英国では周年見られ、Clacton 棧橋付近の公園やロンドン塔付近の芝生で群れていた。
7 *1		ツバメ(英名: Barn Swallow) 日本には夏鳥として渡来する。 Saltburn 棧橋付近で見られたが、遠くてよく特徴が見えなかったので、〇〇ツバメという種かもしれない。
8 *2	 (現地撮影写真 ♀)	イエスズメ(英名: House Sparrow) 稀な迷鳥(※1)として北海道で記録がある。日本のスズメと異なり頬に黒斑が無い。日本のニューナイスズメも黒斑はないが雌成鳥の色合いが異なる。ロンドン塔付近の芝生で群れていた。
9 *1		(日本でいう)カワラヒワ(英名: Greenfinch) 日本では市街地の樹木から山地の林まで生息し、周年見られる。英国でも同様。クラクトン棧橋付近の公園の樹木で見られた他、Hawkshead 付近の樹林から鳴き声が聞こえた。
10 *1		シジュウカラ(英名: Great Tit) 日本では市街地の樹木から山地の林まで生息し、周年見られる。英国でも同様。ポントカサス水道橋の樹林から鳴き声が聞こえた。
11		モリバト(英名: Wood Pigeon) 首の両側にある白色の斑が目立つ。日本の南方の島に棲んでいるカラスバト(英名; Black Wood Pigeon) の仲間。Clacton 棧橋付近で見られた。
12		カワラバト(ドバト)(英名: Feral Pigeon) 本来欧州、中央アジア等の乾燥地帯に生息していたものが日本に渡来した。家禽化され、食用や伝令用として利用された他、愛玩用の品種も多数作られた。市街地や郊外のオープンな環境で良くみられる。ロンドン塔付近の路上に群れでみられた。

●見られる場所：棧橋、海の近くなど


13		ユリカモメ(英名: Black-headed Gull) “東京都の鳥”ユリカモメは英国にもいる。冬になると白い顔になるが夏は顔半分が黒くなる(わずかに茶色)。ズグロカモメに似るがくちばしと脚が赤い(ズグロカモメは黒)。視察時はほとんどの棧橋で見られた。
----	---	--

表1 鳥類確認種一覧(3)









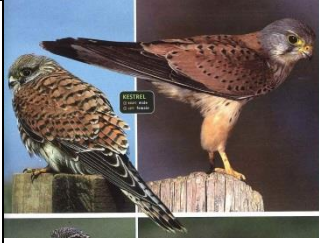

No	写真(*マークは図鑑より引用)	種名・概要
14		セグロカモメ (英名:Herring Gull) 日本では冬鳥として全国の沿岸部などに渡来するが、英国では周年見られる。視察時はほとんどの栈橋で見られた。カモメ類の見分け方は、背中の色、嘴や足の色などの特徴を見るが、夏と冬で羽の色が変わる場合や、年齢によって羽の色が違うので識別には注意が必要である。
●見られる場所：池や川など		
15		コブハクチョウ (英名:Mute Swan) 日本では湖沼や公園で飼育・観賞用として移入したものがよく見られる。英国では周年見られる。気性が荒いので特に雌がいる場合は近寄ってはいけない(攻撃される)。Skegness のホテルの池やウィンダミア湖で見られた。
16		(日本でいう)ハイイロガン(英名:Greylag Goose) 日本には冬鳥としてごく少数が渡来し、湖沼、河川、水田で見られることがある。今回見られたのは欧州に分布する種で日本には渡ってこない。Skegness のホテルの池で見られた。
17		カナダガン (英名:Canada Goose) 日本に渡来するシジウカラガンに似るが、長いくちばしと胸全体が白いことで見分けが容易。英国では周年見られる。Skegness のホテルの池やウィンダミア湖で見られた。
18		バン (英名:Common Moorhen) 全身黒っぽく、くちばしの赤色が目立つ。関東地方より南では周年見られ、池や河川でよく泳いでいる。英国では周年見られる。Skegness のホテルの池で見られた。
19		オオバン (英名:Eurasian Coot) 全身黒く、額からくちばしにかけて白色が目立つ。日本では主に冬鳥として渡来し、池や河川でよく泳いでいる。英国では周年見られる。今回は Skegness のホテルの池で見られた。
20		マガモ (英名:Mallard) 日本でも池や河川でよく見られる。公園の池にいる青首のアヒルはマガモを飼育し改良したもの。Skegness のホテルの池や Southwold 栈橋近くの池で見られた。

表1 鳥類確認種一覧(4)

No	写真(*マークは図鑑より引用)	種名・概要
21		American Black Duck 英国では迷鳥とされている。日本のカルガモに似るが色がやや黒い。私が英国で購入した鳥の図鑑には載っていなかったがおそらく本種と考える。Southwold 栈橋近くの池で見られた。
●見られる場所：草原、畑などオープンな環境		
22 *1		(日本でいう) チョウゲンボウ (英名：Kestrel) パタパタ飛ぶ小型のタカ。バスで移動中に草原や麦畑などの環境でよく見られた。本種は上述のようなオープンな環境でネズミ類や昆虫などの小動物や狩って捕食する。
●見られる場所：里山などの森林		
23 *1		(日本でいう) ノスリ (英名：Buzzard) アイアンブリッジ奥側の森林から餌をねだる幼鳥の鳴き声(餌乞声)が頻繁に聞こえた。周辺に巣があるものと考えられる。また、飛翔して林内に消失する親鳥と考えられる個体も確認された。

英国では日本で見られる鳥類を多く確認することができたが、主に“冬鳥”として見られるオオバンやハイロガンなどが、視察時の夏季に見られるのは不思議な感覚であった。また、日本では“迷鳥”として稀に見られるクロウタドリやニシクマルガラスが英国の道端、あるいは芝生などに日常的に群れている様子には驚いた。居るところには居るものである。

その他、Southport 栈橋の喫茶店内に「Birds to see from Southport Pier」が掲示されていたが(図1)、日本の海岸や干潟でも掲載種の多くをみることができる。

ポスター左側に「On the shore」の鳥類を紹介してあったが、Southport Pier 周辺の干潟は視察時に観察されたようにマテガイの仲間や二枚貝の遺骸が多量にあったため(図2)、底生動物の資源量が豊富であると推察される。よって、シギやチドリ類といった干潟で貝類や底生動物を採餌する鳥類が多くみられるのであろう。また、小型のシギ類は**バイオフィーム(微生物膜)**(※2)も採食していることから、Southport は底生動物の資源量とともにバイオフィームも発達する環境にあるものと推察される。

※1 迷鳥：通常は分布も渡来もしないが、台風などの気象条件やその他の偶然により、本来の分布域から外れた地域に出現した鳥。

※2 バイオフィーム(微生物膜)：微細藻類、バクテリアおよびそれらが細胞外に放出する多糖類粘液で構成された0.01-2mmほどの薄い層の総称であり、静穏な干潟泥の表面によく発達する。



図1 Birds to see from Southport Pier(左 : On the shore, 右 : On the water)



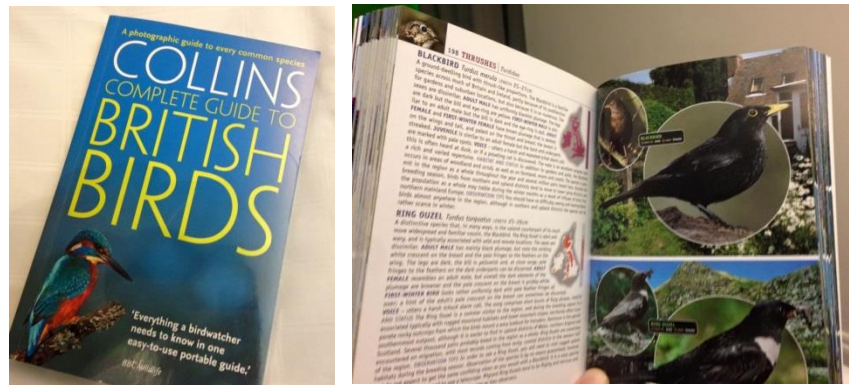
図2 棧橋周辺に散在するマテガイ類や二枚貝の遺骸

海外に行くと様々なことにカルチャーショックを受けるが、生き物の面でも同様であった。

今回の栈橋視察では、“日本の栈橋”と“英国の栈橋”について、その様式や役割の違い、栈橋の文化的な認識の相違について学んだ。英国(海外)では当然の事象が日本では珍妙であり、その逆もまた然りである。日本の固定概念にとらわれず、柔軟な思考で物事を多面的に見るという感覚やその重要性について、英国の栈橋視察と鳥類観察を通じて再確認できたことは成果の一つであった。

先人の残した知恵や技術に加え、今回の視察で得たような“感覚”を意識して、各々の事業に取り組むことができれば、日本のインフラ整備はより良いものになっていくと考える。

最後に、英国の書店に“鳥類図鑑”を購入に行った際、書店員に「図鑑はどこか？」と尋ねたところ、私の“Birds”の発音が不明瞭だったため、最初にバスタブのカタログコーナーに連れて行かれたのはご愛嬌である。



参考文献

1. Paul Sterry, COLLINS COMPLETE GUIDE TO BRITISH BIRDS, 2004, HarperCollins Publishers Ltd
2. 真木広造, 大西敏一, 日本の野鳥 590, 2000, 株式会社平凡社

写真引用(*マーク)

- *1 Paul Sterry, COLLINS COMPLETE GUIDE TO BRITISH BIRDS, 2004, HarperCollins Publishers Ltd
- *2 真木広造, 大西敏一, 日本の野鳥 590, 2000, 株式会社平凡社